

献呈の辞

平成三〇年七月十七日、敬愛する岩渕美克先生のご訃報に接して、早くも一年余の月日が流れました。六〇歳という若さで突然この世を去ることになり、その驚きと悲しみは、とても言葉で言い尽くすことができないほど、大きなものでした。

岩渕先生は、世論及び選挙の研究者として、慶應義塾大学大学院在学中より注目され、以来この分野の第一人者として学界をリードしてきました。一九八〇年代に、議題設定機能や沈黙の螺旋理論といったマス・コミュニケーションの効果研究モデルをマス・メディアと政治の実証的研究に応用していますが、これは日本における同種の研究の先駆けといえるもので、その後の多くの研究者に多大な影響を与えました。岩渕先生の研究は、政治学とマス・コミュニケーション研究を方法論的に結びつけた、数量的な調査により実証的な知見を得ようとするものです。現在では、ごく一般的なアプローチとなっておりますが、それこそが岩渕先生のご業績の賜物と言えます。

また岩渕先生は、戦後五五年体制の終焉が選挙制度改革だけではなく、人々の政治意識と投票行動にも変化をもたらしたことに注目しました。そのような政治システムの変容が選挙をメディア型選挙に変えていくことをいち早く見抜いたのは、岩渕先生の慧眼を物語るものです。メディアが選挙キャンペーンに積極的に活用され、世論形成の主要因子になるという知見は、英米圏における研究動向のタイムリーかつ的確な把握と学会等での積極的な学術的交流

から導き出された岩渕先生ならではの見識です。その見識からは、同時に日本の民主主義のあるべき姿を規範的に問題提起しようというスタンスにも繋がっていきました。このような一九九〇年代以降の世論及び選挙とメディアの関連に主題をおいた岩渕先生の経験的アプローチ研究は、現在のデジタル・メディア環境におけるソーシヤル・メディアと選挙の結びつきを検証する研究分野の発展にも寄与しています。

世論研究、選挙研究の泰斗として、戦後政治を一貫して検証し続け、その見識は学界のみならず、政治を中心としたジャーナリズムにも多大な貢献を果たしました。政治に関する問題が生じたときに、岩渕先生が新聞やテレビでコメントを求められないことはないと言いきれるほど、政治ジャーナリスト達に信頼されていました。そのことは、単にジャーナリズムの業界内にとどまらず、政界はもちろんのこと、広く日本の国民に影響を及ぼしていたことを意味します。また、全国の多くの自治体等での講演活動を通じて、選挙制度の公正な運用に向けた社会的な啓蒙活動も精力的に行ってきました。これらは、岩渕先生の問題意識である、日本にいかにして民主主義の政治文化を根付かせるかというテーマに沿った活動でした。単に研究室に閉じこもって研究を行うというのではなく、あくまでも日本の社会に貢献しようとしてきた岩渕先生の真摯な姿勢の表れであるといえるでしょう。

岩渕先生は、すぐれた教育者でもありました。日本大学法学部新聞学科という伝統あるジャーナリズムの高等教育機関にあつて、長い間その基幹科目たるマス・コミュニケーション理論の講義を担当なさつてこられました。岩渕ゼミナールには、岩渕先生を慕つて、毎年多くの学生がその門をたたきました。極めて多忙であつた岩渕先生ですが、学生達と接する時間を本当に大切にしておられました。講義や研究指導を熱心に行つておられたことはいうまでもありませんが、それだけにとどまらず、いろいろな学生との会合にも時間を作つて顔を出しておられました。このよう

な岩渕先生の薫陶を受けて、現在ジャーナリズムを中心に社会の第一線で数多くの卒業生が活躍しています。

岩渕先生は、本学の執行部の一員として学部運営にも多大な貢献をなさってきました。日本大学法学部に赴任して以来、様々な形で入試関連の業務に携わってこられました。産業としての大学という業界は、必ずしもその前途が明るくはありません。そのような中で、魅力ある大学とは何か、受験生に選ばれる大学とは何か、そうしたことを常に懸命に考えてこられました。少子化の流れの中でも、日本大学法学部が大幅な志願者減にならなかつた一つの理由として、岩渕先生の存在をあげることができます。

日本大学大学院新聞学研究科の創設に関しても、岩渕先生の存在を抜きにして語ることはできません。大学院を立ち上げるには、煩雑な手続等が伴い、それだけに専念しても、なかなか処理しきれないような大変な労力を伴います。しかしながら、岩渕先生は研究と教育と学部運営に忙殺される中でも、理想のカリキュラムを追求し、それが文部科学省の承認を得るために並々ならぬ情熱を注いでくださいました。新聞学研究科が開設にこぎ着け、日本で唯一の新聞学、ジャーナリズム学の大学院として、今日を迎えているのは岩渕先生のおかげです。

本論文集は、岩渕先生を心から敬愛する研究者によって編まれました。岩渕先生が一貫して研究テーマとされてきた「民主主義」の礎の多角的な研究論文が多数寄せられました。岩渕先生のご逝去を悼むのに相応しい論文集であると思います。一周忌にあたり、故岩渕美克先生の御魂に本論文集を献呈致します。

令和元年七月吉日

日本大学法学部長 小田 司

